嬉泉の新聞

嬉泉の新聞　第81号　2020年（令和２年）3月発行
発行＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋１－30－９（〒156－0055）TEL 03－3426－2323
http://www.kisenfukushi.com　E-mail：kisen@kisenfukushi.com

「理事長に就任して」

～ 須藤前理事長を偲ぶ ～

社会福祉法人　嬉泉
理事長　**石井　啓**

この度、須藤祐司前理事長が亡くなったことに伴い、社会福祉法人嬉泉の理事長を拝命致しました。社会福祉法人という公の責任を担う使命を持った組織の長となることは、いわば社会の公器としての責務を負うことであり、その重大性と求められる役割の重さは計り知れません。果たしてそのような大役を、私如きが背負い切れるのか、脚の震える思いがしますし、この役目をいただくのは心ならずもと言うのが率直なところです。まだまだ須藤先生の下でご指導を受けたかった。ここ数年は病を得ておられたので、このときが来ることは半ば覚悟していたつもりでしたが、いざ実際に亡くなってしまわれると、如何に須藤先生の存在が大きなものであったか、改めて思い知らされました。

思い返せば須藤先生は、常に機嫌良く人と接しておられました。にこやかに挨拶され、微笑みながら相手に向き合い、親しげに声を掛けたり、時には握手を求められたりと、人を逸らさない立ち居振る舞いをされていたと記憶しています。それは社会人として範足り得るのみならず、組織の長として多くの人をまとめてゆくのに必要なことで、気分にムラのあるところが隠し切れない私にとっては、常に尊敬と憧れの的でした。

また須藤先生は、社会福祉法人の業務についてはほぼ全面的に、常務理事であった私に委ねてくださっていましたが、理事長としての責務はきちんと果たしておられました。業務のことで私が考えて判断したことは、ほぼそのまま支持して下さり、水を差すようなことはなさいませんでしたが、私が判断に迷ってご相談申し上げたことには、実に的確にお答え下さいました。そして「責任は私がとるから、おやりなさい」と仰いました。この一言でどれだけ勇気づけられたことか、感謝の念は言葉に尽くせないほど嬉しかったことを覚えています。

須藤先生は、医師として病院経営もなさっておられたので、謂わば本業はそちらであって、社会福祉法人の経営については先頭に立って旗を振っていた訳ではありませんでした。しかしながら、上記のように本当の意味でのリーダーシップを持っておられた方でした。それは、まさに私の目標とするところに他なりません。

非才の身である私に、果たして須藤先生のレベルまで到達することが出来るのか心許ないですが、それ以上に今は、石井哲夫も含めた先人から渡されたバトンを受け取り、それを次代に繋いでいくこと、即ちこの嬉泉という組織を存続させていくことが私のミッションであり、それをやらねばという思いで、与えられた役割を全うしようと決意したところです。

どうぞ皆様のお力添えを頂けますよう、伏してお願い申し上げます。

社会福祉法人嬉泉二〇二〇年度基本方針

社会福祉法人嬉泉　理事長　石井 啓

1. 法人理念

（1）ミッション
「誰もが自己実現し得る共生社会の実現」
（2）支援方針
「受容的交流の立場に立った利用者支援」
（3）経営方針
「明確なコーポレートガバナンスによる持続可能な法人経営」

2. 現状と課題

本法人には25事業体があり（本部含む）、職員総数は2020年1月1日現在で481名（常勤356名・非常勤125名）と、非常に大きな規模の組織になっています。また、事業活動の総収入は27億円（2019年3月31日現在）ですが、この数字は決して小さくはありません。いわゆる社会福祉法人改革の中で、（現在は30億円以上の法人に限られていますが、）収入の20億以上の法人は外部監査が必要ということになったのを知っている方も多いと思います。

昨年から引き続いての課題は、収支構造の問題で、支出に占める固定費の割合、人権費が80パーセントを超えていることです。社会福祉は特に人が基本ですから、給料や社会保険のコストは、支出の中で最も大事といっても過言ではないと思いますが、その割合が高いのは一般的な企業の感覚だと、〝経営を圧迫している〟といわれてしまいます。しかし、人件費＝職員の存在は法人にとってかけがえのない資産だと思っていますので、必ずしも固定費が多いからマイナスとはとらえず、業務執行の体制整備をしていくことが課題であり、常に優先して取り組んでいきたいと思っています。

もう一つ収支構造の問題としては、利用者の、定員に満たない事業所と、構造的に収支バランスの取りにくい事業があることです。通所の事業は利用者の稼働率が高くないので、利用者数の安定的な確保が課題です。相談支援事業所は一人の職員が100ケースくらい抱えているのが現状で、そのなかでモニタリング・利用計画作成・関係者会議等を行わなければならない構造になっています。これは嬉泉の問題というよりも大元のシステムの問題であり、他の法人でも相談支援は割に合わないと言われています。しかし課題はありますが、やるべきこととして、頑張って支えてやっていこうと思っています。

次にサービスの質の問題です。これも継続の課題で、人材難の中での人材の確保と定着については、働き方改革・就労環境の改善が社会的に要請されており、そうあるべきだと思っていますが、利用者ニーズを充足させる時間が現場によっては足りていない、十分ではないところもあります。働き方改革といえば時短といわれ課題だとは思いますが、相反することが出てきてしまいます。人材不足という状況で、一人一人が働き方を見直す中で、業務を見直して効率化して短い時間のなかで前と同じパフォーマンスができれば問題ないですが、なかなかそう出来ないなかでどうしていけばいいのかが課題です。法人全体で前向きに対応してきていますが、かえって役割や業務を効率的に進めることに追われてしまい、中身（サービスの質）をどう維持向上していくのかが置き去りになり、後回しになってしまうことが懸念されます。

そこで、「サービスの質の高さ」の追求を大事にし続けられるように、課題への抜本的な対応として、育成主義のキャリアパス体制を構築し、今年度から本格稼働しています。ただ、育成の実践力の不足は共通の課題です。人を育てるのは難しく、子育て一つとっても、自分の子どもを育てることでも大変です。人が人にかかわって影響しあう中で、いい道筋をつけていく、いい方向に向けていく、いい刺激を与えあうことを意図したとしても、受け取る側の感覚的なものや考え方やバックグラウンドが違うため、望むようなやりとりになりにくいことがあります。今後はサービスの質の維持向上につながる育成について、研修や協力体制を広く法人で整え、実を挙げる策を模索していく必要があると思っています。

経営規模が増大しているところに、今回、理事長の交代があり、法人事業運営について職員各位とより明確に、ビジョンの共有が必要となってきました。共通認識がなけれ

ば、一緒の方向を向いていい仕事をしていくのはむずかしくなります。

事業所、拠点間での相互協力は無論のこと、あらゆる職層、職種、年代を超えての職員相互の支えあい、育てあう体制強化が求められます。それを実現するための運営組織の再編成が課題ですが、２０２０年度に試みようと思っていることがあります。

3．展望と方針

（1）展望

法人運営組織体制の再編についてですが、受容的交流は支援の理念だけでなく、運営の理念でもあります。職員全体が、自分の仕事を自分の意志でよくしようとすると同時に独りよがりではなく、周囲と相談し、折り合い、納得しあい、力を合わせることで組織の中で自己実現を目指すような仕事の仕方をしてほしいと思っており、こういったことを求めていける組織を目指しています。

全ての事業所、すべての職員に「直接」求め、支え、助け、労いあうことはできませんが、それを助け代わりに担ってもらう人を明確にした組織体制を作ります。そしてサービスの質・人材育成の根幹である受容的交流を理解し、伝え合い、高めあうための手がかりとして、今後、毎年「支援テーマ」を設けていきます。実践や育成、受容的交流の中で実際の現場の中で意識できる〝キーワード〟や〝投げかけ〟となる重点を置きたいこと、テーマを共有するための〝手がかり〟とします。また、職員の全体研修もそこにつなげていきます。管理運営を担う職員が支援テーマを狙い通りに活用して実を挙げ、育成を担う職員は、育成する対象者への育成テーマとして活用し、そしてすべての職員が主体的にテーマについて考え、周囲の人と語り合い、学びあい、SVや育成を受け、受容的交流の実践に結び付け、高め、広めていくことを目指してほしいと思います。

（2）本年度支援方針

本年度の支援テーマですが、「アセスメントを考える」としました。「その人らしさを知ること、正しく本人理解を行うために必要なこと」がアセスメントであるととらえていますが、ソーシャルワーク領域におけるアセスメントとは、クライエント援助のための情報収集とそれに基づく事前評価を意味していることが多いです。必ずしも、正しく本人理解をすることを追求していくのとは違う使われ方をしている感じがしています。援助活動の過程では、常に情報は更新され、それに伴い援助者の解するクライエント像も刻々と変化するため、そうした援助実践におけるダイナミズムをも包括したアセスメントこそが、受容的交流の一側面ではないかと思っています。

（3）本年度経営方針

・事業活動支援体制の強化

今までの評議員会・理事会・また、場長会に替わる経営会議を作り、それぞれの役割に応じた業務執行を通じて、個々の事業運営を法人全体で把握し、支援する体制を強化し、持続可能な組織形成を目指します。

・人材育成主義人事制度の定着化

キャリアパス体制での育成活動がスタートし、新人事考課制度が発足しましたが、これらを人材育成システムの中核と位置づけ、全体として育成主義人事制度と名付け、公正な人事管理を推進し、働き甲斐のある職場づくりを目指します。そして職員全体が生き生きと目標を持って働きやすい職場となるよう軌道に乗せて定着化をはかります。

このような基本方針のもと、すべての職員が気持ちを揃えて、よりよい支援を行っていきたいと思います。

前理事長 須藤祐司を偲ぶ

令和元年10月14日、当法人前理事長　須藤祐司が79歳にて逝去いたしました。12月18日には浦安ブライトンホテルにて「前理事長須藤祐司先生を偲ぶ会」を執り行いました。このたび、「偲ぶ会」のご報告とともに、ゆかりのある方々にお寄せいただいた追悼文をご紹介し、在りし日の須藤先生を偲びたいと思います。

須藤前理事長を偲ぶ会のご報告

この会は永らく嬉泉にご献身された須藤先生の思い出をともに偲ぶ機会として、前理事長夫人須藤としえ様をお招きし、社会福祉法人嬉泉の関係で特に須藤先生とのつながりやゆかりのある方々にご参会いただき、執り行ったものです。法人の役員や評議員の先生方、お付き合いの長い保護者の皆様や旧職員等に、現職員を加えて、七十三名の参加となりました。

会場となった浦安ブライトンホテルは、以前行っていた法人の年頭所感会や年度末の全体職員研修の会場として何度か利用しており、須藤先生もご参加くださっていました。そうした機会に、須藤先生が、私たち職員に対してよくお話しくださっていたのは、初代理事長先生の世のため、人のために尽くすという志と石井哲夫先生の自閉症に対する熱い思いが出会って社会福祉法人嬉泉が誕生したこと、また、利他の心で志を高く持ち、目標を定め進んでいくことの大切さ、仕事に対する前向きな意識の持ち方や姿勢について等です。また三行日記など、自己研鑽のための具体的な習慣のすすめ等についても、度々お話してくださいました。そして、言葉だけでなく、常に須藤先生ご自身が身をもって模範を示してくださっていました。

いつも職員のことを気にかけ労い励ましてくださった、須藤先生の温かい笑顔と深いまなざしがよみがえり、今にも声が聞こえてくるかのようでした。

会は、黙とうの後、スライド上映により、在りし日の須藤先生が紡いでいらしたご家族との貴重なシーンや、バザーにお越しいただいた時に職員と一緒に記念撮影していただいたもの等、一同ほほえましく懐かしく拝見し、その後、参会者を代表して、石井啓理事長、山根美江子理事、田村紀子評議員（袖ケ浦ひかりの学園保護者）、大岩香代子（職員代表）の順に弔辞を述べました。それぞれの立場で、須藤先生との関係やかかわりの思い出、影響を受けたり印象に残っているエピソード、須藤先生への感謝等が語られましたが、どのお話にも、須藤先生の慈しみに満ちた気さくなお人柄と懐の広さ、その中に揺るがない高い志と強い信念が貫かれていることがうかがえ、改めて、それぞれの方にとって、また当法人にとっての、須藤先生の存在がいかに大きいものであったかをうかがい知ることができました。

石井哲夫先生と初代理事長先生の遺志を引き継ぎ、生涯変わることなくお二人を尊敬し献身された須藤先生に、これまで私たちは守り支えられ、ここまで来ることができました。これからは、石井理事長の元、職員皆で力を合わせ、須藤先生が守ってくださったものを、私たちが継承していかなくてはなりません。

須藤先生のご平安をお祈り申し上げるとともに、どうぞこれからも、私たちの歩みを見守っていてください、と願いを込めました。

弔辞の後は，石井理事長、須藤としえ様に続き、法人役員、評議員の方々、職員一人一人が献花をし、最後に、須藤としえ様にご挨拶いただ

田村紀子評議員

山根美江子理事

石井啓理事長

きました。

以下、ご挨拶の言葉をそのまま、載せさせていただきます。

須藤前理事長夫人のご挨拶

本日はこのような立派な「前理事長須藤祐司を偲ぶ会」を開いていただきました石井新理事長先生、ありがとうございます。そしてまた本日はお忙しい中、監事、理事、評議員の先生方、たくさんお集りいただきまして、本当に心より感謝と御礼のご挨拶を申し上げます。ありがとうございました。

須藤前理事長は、社会福祉法人嬉泉が大好きで、いつも集りがある前日になりますと、「お母さん、明日はあのね、袖ケ浦に行く日なんだよ、世田谷に行く日なんだよ」とそのように子どものようにうれしく話しておりました。ですから今日もきっと、呼べど答えず姿は見えなくなりましたが、きっときっと皆さんお一人お一人に「うれしいよ」と言って御礼を申し上げていると思うんですね。ありがとうございます。「僕はね、これからも姿は見えないけれど、絶対皆さんをお守りしていますよ。そしてお子さま方、ご父母の方々、本当にね、お守りしますよ。安心してくださいね」ときっと言っていると思います。

本当に、今日はありがとうございました。私は自分で何を言ってよいのかわからないのですけれど、心より心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。そして新しい石井理事長先生が誕生しましたので、皆さん一丸となって、ますます社会福祉人嬉泉が、活躍なさいますよう心より願っております。

前理事長夫人　須藤としえ様

最後になりましたが、当日ご参会いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。また、その他各方面のたくさんの関係者の皆様、生前のご厚情を深く感謝致すとともに、今後とも一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（大田区立こども発達センター
わかばの家　施設長　大岩香代子）

前理事長夫人を囲んで～役員・評議員の方々

献花

須藤前理事長へのメッセージ

須藤前理事長と関係の深かった皆様より須藤前理事長を偲ぶメッセージを頂きましたので、掲載させていただきます。

須藤祐司前理事長を偲んで

社会福祉法人 至誠学舎立川　顧問
社会福祉法人 嬉泉　理事
高橋　利一

この度のご逝去、心より哀悼の思いを捧げます。

私は多くは社会福祉法人嬉泉の会議でお目にかかることしかありませんでしたが、毎回のご挨拶を頂く中で、おおらかで温かい先生のお人柄を感じておりました。医者として医療に関わる先生が、障害者の人権を重く意識され、福祉経営に関わられているお姿に、先生は障害者の思いの代弁者であられ、またそのご覚悟がお言葉の中に表現されておりました。

私は児童福祉の現場で仕事をしており、特に日本社会事業大学では石井哲夫先生が定年で大学を退かれた後、就任し、研究室を使用させていただき教員として勤めました。研究室には石井先生の障害児に対する学者としての見識とその研究スキルは、オーラとして感じられ、須藤先生と一致するものがおありだったと思います。それは石井哲夫先生が残された文献から、須藤先生と共感的な一致点が、その理念として伺われました。須藤理事長先生より、「その人がいることで自分が生かされている」というお言葉を伺ったことがあります。医療という科学化された治療意識と、一人の人間としての思いは、その両面から、先生は障害者の代弁者としての存在になられていたのだと思います。

天上にて、まだまだ理事長としてバックアップなされるお姿が浮かびます。どうぞ安らかにお過ごしくださることをお祈りいたします。

須藤祐司前理事長を偲んで

社会福祉法人 慈愛園　理事長
社会福祉法人 嬉泉　理事
潮谷　義子

「須藤先生……」思い出しただけで温容にして毅然とされていたお姿が甦ります。

初めてお会いしました時、「あの、一休さんみたい」と思ってしまいました。絵画やマンガの本、お芝居でみる一休さんのイメージそのままの雰囲気の先生でした。私が幼い時から口ずさんできた〝トントン　トンチの一休さん　この橋　渡ってなりません〟「そうかい、そんなら真中をトントントーンと渡りましょう」という童うたが思わず口をついて出そうになりました。

それ以来、先生と私は理事長と理事という立場をこえて、人間として畏敬の念を抱き続けたかけがえのない存在でした。

又、先生はユーモアの人でもありました。

「作業所のブタマンは本物志向で作ってますからおいしいです。品薄になる位よく求めてくださいます。勿論みなさんの分は確保していますけどネ」

誇らし気に茶目ッ気一杯で自慢されるお姿が今でも思い出されます。

理事会の時は、比較的先生と私の席は近く、私には先生の呼吸が気になり、声のトーンが弱々しさを増していかれるお姿を垣間みることが多くなってまいりました。大丈夫でいらっしゃいますかと問う私に大丈夫ですと傍らの啓先生を省りみられつつ会議を進められるお姿をみせていらっしゃいました。先生は医学者、実践現場の医者としてきちんと御自身を診断されていらっしゃったと想像しています。

今思いますと、決して弱音を吐かず自分自身を受容されて日々をお過しになられていたのでしょう。

しかし、こんなに、忽然として惜別の時を迎えるとは全く思っていませんでした。

御遺族の悲しみの深さは想像して余りあります。私達も辛く哀しく、淋しさがあります。先生が大事にされたこの嬉泉を微力ですが多くの関係者と共にしっかりとお支えしてまいりたいと願っています。

先生、本当にありがとうございました。

須藤祐司前理事長を偲ぶ

愛知学院大学心身科学部学部長
社会福祉法人嬉泉　監事
中島　健一

須藤祐司前理事長のご冥福をお祈り申し上げますとともに、これまでいただいたご恩に深く感謝申し上げます。

須藤祐司前理事長は、理事長としてその業務を適切に実行し社会福祉法人嬉泉の舵を取ってまいられましたが、同時にその人柄により職員のこころの支えとなり人々を癒やされてこられました。尊大さとは一切無縁なお方で、誰に対してもいつも笑顔で暖かい手の温もりを感じる握手をしてくださいました。一方、己が信じる事へのこだわりは、あの『肉まん』にも強く込められているように思います。言葉ではなく背中を見せることで模範となる、まさにそのことを体現なさってこられたすばらしい方でした。そのような方を失うことは、社会福祉法人嬉泉にとって大きな痛手ですが、理事会等でもうお会いできないのかと思うと個人的にもこころにポッカリ穴が空いたような気持ちになります。

嬉泉もずいぶん大きくなりました。大きくなったが故の課題もございますが、石井哲夫先生とご一緒に蒔いてこられた種は、石井啓新理事長の下で一丸となって育ててまいる所存でございます。天の上からここころ安らかに安心して見守っていただきたいと願っております。

須藤祐司 前理事長の思い出

社会福祉法人嬉泉　評議員
吉岡　則重

須藤祐司さんは慈父のような方でした。いつも柔和な笑顔で、皆を支えてくれました。専門外のことは、自分が口出しするより専門家に任せた方がよいと考え、支える役割に徹していたのかも知れません。役員会でも、その温かい人柄で皆が発言しやすい雰囲気を醸し出してくれていました。

偲ぶ会の後で、奥様から直接伺ったいくつかのエピソードも、その人柄を彷彿とさせるものでした。

カメラがご趣味で、木についた虫の写真をとるために20分も30分もかけていたこと、ロードバイクを何台も買い込みながら結局処分してしまったこと、熱帯魚にこだわり水槽を家の中に10個近く並べながら、水槽の掃除はしなかったことなど、微笑ましいものばかりです。そんな須藤さんが楽しみにしていたのが、月に1度、嬉泉を訪れることで、利用者や職員に親しく声をかけていたそうです。

そんな須藤さんの、理事長らしい別の一面を垣間見たことがあります。もう時効でしょうから、ここに書いてもよいと思いますが、私が特養の建設プロジェクトを進めていたとき、地元区から障害児者の施設の併設を求められました。私の法人だけでは難しいので、嬉泉の皆さんに相談を持ちかけると、皆さんは賛成してくれたのですが、須藤さんが「いい計画でも、無理はしないように」とおっしゃったと後から聞きました。確かに、施設としては少し背伸びした計画だったので須藤さんの慧眼に敬服しました。いつも笑顔を絶やさない方ながら、しっかりと見ておられるのだなと感じ入った次第です。

そして、忘れてならないのは「嬉泉の肉まん」です。こういう形で障害者の就労を応援してくれました。誰にでもできることではありません。須藤さんの暖かい人柄があったからこそできた事業です。須藤さんの熱い意志に沿うべく、関係者が気持ちを一つにして継続していかなければと思います。

須藤さんは、その柔らかな立ち居振る舞いで、私たちに仕事に取り組む姿勢を見せてくれました。これからも、道は平坦ではないでしょうが、嬉泉は、石井啓さんを中心にして、私たち皆でしっかりと守っていきますのでご安心下さい。

次回の役員会では、また須藤さんにお会いできるような気がしてなりません。

須藤さん、これからも私たちを、お導き下さい。

令和元年12月19日
偲ぶ会の翌日、遺影を思い浮かべながら

須藤祐司先生を偲ぶ

社会福祉法人嬉泉　理事
山根　美江子

須藤祐司先生に、はじめてお会いしたのは、昭和五十六年頃だったと思います。袖ケ浦にのびろ学園が開設されて4年目の春でした。先生は、学園に行事がある時は必ず東京の葛飾から車で駆けつけて来て下さいました。

その頃の袖ケ浦は人里離れ、林に囲まれた広い敷地の中に児童棟と管理棟と職員宿舎がポツンと建っており、早朝にはキジの親子が餌をついばみ、夕方には野うさぎやたぬきが道を横切るような寂しい所でしたから、職員も気を張って緊張して仕事をしていました。

先生は、いつも笑顔で職員一人一人にやさしく声をかけて激励して下さいました。

あの笑顔と一人一人にやさしく声をかけるお姿は、今でも忘れることのない心暖まる思い出として残っています。又、私は昨年8月まで先生に主治医としてお世話になっておりました。私の住んでいる所が、医療の場がないというのではなく、地元の病院が投げ出してしまうような問題が起ると、先生に電話をして事情を話していました。

先生は、どんなに忙しくても「すぐ来なさい」と受入れて下さり、ある時は、コンピューターを1時間以上、操作して肺炎であることを見つけ出して下さいました。先生はよく「世のため、人のため」とおっしゃいましたが、その信念を笑顔と誰れにも気さくに声をかける、やさしい心をもって通された方で、私は尊敬していました。

須藤先生、仕事の面でも個人的な面でも、たくさんのご指導をいただきありがとうございました。

須藤祐司前理事長との思い出

社会福祉法人嬉泉理事
亀谷　一雄

須藤祐司前理事長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。須藤先生を思い瞼を閉じますと満面の慈悲のある笑顔と優しく抱擁力のあるお姿が浮かびます。

誰れ一人として分け隔りなく職員ひとり一人にお声をかけていただくたび、職員は温かい「ひだまり」のような安心感を頂きました。理事長とお逢いしてよくお話の中で出ておりましたお言葉で「人生は時の旅人焦らず　逆らわず」だからね。亀さんのごとく亀太郎のごとくゆっくり長い時間を一つ一つ福祉、職員の為に積み重ねて行くことが大事な事業貢献であり、利用者さん、父母の方、職員への慈恵として表われてくるものだからね、と必ずやさしく語尾に「ね」をつけて教訓をいただきました。

ちなみに亀太郎とは御自宅で奥様と一緒に大切に家族の一員として飼っていた「リクガメ」です。

広いお庭にて亀太郎を運動、日光浴をした大切な御家族です。その周辺には季節ごとのカエル、イモリ、昆虫、犬、猫を供にやさしく見守って、愛用のカメラに治めておりました写真を時折、見せていただきました。

私を大好きな大相撲の関取りとして、年間六場所ある中での話題を振って、当時の場所中のことを冗談まじりと笑いで楽しい時間を過ごさせていただきました。事業に関しても理事会、評議員会において事務局へのフォローと助言、指導を理事、評議員の先生方が納得いくように的確な進行のもと導いていただいた事、数え切れない程です。

すべての人々に水戸の御老公のごとく私たちを眼力と笑顔で引導なさってくれました。

ドラえもんの似顔絵が上手で、朝早起きで奥様が大変で、読書好きで御家族に甘えられたかわいいお人柄も見せていただきました。ただ一つお約束をしておりましたオリンピック開催までは（東京五輪ではなく次のパリ五輪）と、理事長も出来るかなといいながらも「判かった頑張る約束するよ」とのお約束はかなえてもらいませんでした。きっと天国で「ごめんよ、ごめんね」と言っておられると思います。

そして「天より必ず見守っているからね、約束するからね」という事で「許してね」と笑顔をもって堅く実行していただいていると確信しています。二六年もの間、御指導と温情をいただいた事を私自身も当然ながらふれあう人々、職員に伝えていきたいとお約束させていただきます。本当にありがとうございました。

須藤祐司前理事長との思い出

グループホーム春のひかり保護者
山岸　陽子

昨年十月、須藤祐司先生が亡くなられました。

突然のお知らせに、きっといつもお元気なのだと思っていたので、びっくりしました。

先生にはバザーでお目にかかって、気さくな温顔に接することで安心していました。

思い返せば先代の理事長が、時代に先がけて自閉症療育のために、私財を投じられ、嬉泉を創立されました。

最初は利用者三名の出発でした。何もかも不安だらけの未熟な若い親たちに、育てることの大切さを、自然に学ぶ場になっていきました。毎週のミーティングの時に、石井哲夫先生から、今理事長からの電話で、千葉の袖ヶ浦の土地のことを話したと、聞いたことがありました。世田谷の他に次の計画をされていること知ることがありました。何よりも裕たちの喜びは大きかったです。バスや電車に二回乗りかえがありましたが、苦にはなりませんでした。仲間の一人は、朝は朝日、夕べは夕日をみて帰る一日だと話しておられました。

もしその時に嬉泉がなかったらと、いつも考えています。一九六十年代、未知の自閉症の療育を求めて、各地を転々と歩きまわっていたと思います。

今年六十才の裕は、長い時間をかけて、安心して生きています。自分で考え少しずつ他の事にも気がつくようです。

先代の理事長亡き後、すぐ後に祐司先生が、後を引継いで下さいました。今の嬉泉の温かいふれあいの中で、多くの仲間たちが、その人、その人らしく暮らしています。

祐司先生、本当に本当に、ありがとうございました。あのやさしい温顔を思い浮かべております。

須藤祐司前理事長との思い出

社会福祉法人嬉泉めばえ学園園長
樋口　美津子

須藤祐司先生が、子どもの生活研究所に産業医としていらっしゃった頃、職員だけでなく利用者の方とのふれあいを大事にしてくださいました。その温かくも前向きなお人柄からでる言葉はいつも心に直接響いてきたものです。ある日のこと、私が先生と話す部屋に、おおらか学園の利用者のAさんが勢いよく入ってきました。Aさんは明るく社交的で、そして繊細さもある女性です。その大柄な体からは想像できない素早さで、あっという間に先生のすぐ隣にドスンと座ると、「理事長様、私はAです。まあ美味しそうなお茶ですこと。ちょうど喉が渇いたのでいただきます。」と先生のお茶をいきなり飲もうとしたのです。先生は、「それは私のお茶だよ。ワーハハ」と大きな声で笑いだし、それを見たAさんも「オーホホ。それはまた失礼!!」と答え、その後は二人で肩を叩き合い、まるで漫才コンビのようなやりとりが続きました。そして「きみは明るくていいね。笑顔がいいね」とAさんにかけたその言葉を、Aさんは嬉しそうに聞いていました。帰り際Aさんがぽつりと「理事長様はほんとに優しいね。いい人だね」と言っていたことを思い出します。人に対して厳しい見方をするAさんがその時は本当に柔和な顔をしていました。故石井哲夫先生を慕っていたAさんにとって、須藤先生もまた「自分の味方の大好きな人」となった日でした。

須藤先生は、私に「石井哲夫先生の素晴らしい所は、実践を重んじ、現場の中で子ども達と共に暮らし、子どもの特性を見ぬいて、どう自発性や自立（自律）に繋げていくかを考えていた。職員は石井先生の熱い思いを継ぎ、子ども達の幸せの為に受容的交流を現場できちんと生かしていくこと。嬉泉は石井先生の魂だから」とよく話してくださいました。その言葉に私は励まされました。その人を尊重し、その人が人との信頼関係の中で自身の力を発揮し成長していけるよう、その支援者としての道を須藤先生もまた私達に示してくださいました。須藤先生本当にありがとうございました。

第五十五回嬉泉バザーのご報告

澄み切った青空のもと、令和元年11月11日（日）に子どもの生活研究所で嬉泉バザーが無事に開催され、盛況の内に終えることが出来ました。当日は約750名程の沢山のお客様が来てくださいました。袖ケ浦のバザーが台風の被害を受け中止になったことで、袖ケ浦バザーの分まで頑張ろうという思いが、職員の中にも感じられました。

今回のバザーでは、10月に逝去された故須藤祐司理事長を偲ぶコーナーを設け、在りし日の理事長との思い出を皆でかみしめました。

そして地域交流では、人気のチトフナマンのご出演、近隣福祉施設の千歳台福祉園・砧工房さんの出店でのご参加、食堂の食材のご寄附では地域の業者さんなど、皆さんには大変お世話になりました。また船橋小学校のご協力や日頃から防災運動会や盆踊り、チトビアなどのイベントで交流のある船橋会の方にもご来場いただくなど、地域での繋がりや広がりを改めて感じることが出来ました。このご縁を大事にしていきたいと思います。

嬉泉のバザーは、これまでの伝統を継承しながらも、毎年新しい企画を考えなら、バザーとしての新しい形を作っています。地域交流の広がりの中で、保護者の方、地域の方の力に支えられながら、新たな関係と、新たな良い力が生み出され、それがまた嬉泉の力となっていることを感じます。人の力の結集や、繋がりを感じさせてくれるこのバザーを、私達は大事にしながら、また今後も皆でいろいろな意見や考えを出し合いより良いバザーの形を考えていきたいと思います。

年間を通していろいろな形でご協力や応援をいただいた関係者の皆さまや後援会の皆様には、この紙面を借りて、お礼申し上げます。左記、バザーの収益のご報告となります。

（バザー実施責任者　樋口美津子）

係	純益
献品	285,340 円
産直・委託	91,603 円
子どもコーナー	27,860 円
アウトス他	44,150 円
食堂	259,732 円
後援会	28,876 円
総務	292,274 円
合計	1,029,835 円

嬉泉職員によるリレーエッセイ③

毎年9月、保育園にて保護者の方の協力を得て行っている引継ぎ訓練。職員から、「午睡中の子ども達の安全確保をどうするか。今の形で良いのか。」、「実際に電気・ガス・水道が止まった時に本当に必要なことは何か。」という疑問の声が上がり、時間経過と共にライフラインの供給が停止するという災害を想定した訓練を合わせて実施しました。

子どもの安心安全を保障する環境を整えるため、防災備蓄品を倉庫から運び出す、水が出る内に生活用水を確保する、水なしトイレを設置する、内線電話が使用できないので各居室を回って情報を伝達する、ガスコンロでの非常食調理と提供、等々。

頭では分かっているつもりでも、経験に勝るものなし。「不安を感じる子どもへの関わり、保育に入らない限られた職員数で行う初動対応等を実施するにあたり、本当に必要な事や物は何か。」を各職員で、またグループ単位で考え、備えを固めていこうとする姿に頼もしさと共に、職員同士の協働性の構築を感じる訓練となりました。

（宇奈根なごやか園園長　佐瀬美穂）